

人物ライブラリー「学術の記録」

増田四郎篇：内容

〈映像〉

- 東京経済大
キャンパス
を歩く増田
氏
- ロールテ
ロップ（略
歴）

1. オープニング

〈映像〉

- 図書館前広
場で
学生に語る
- 月ヶ瀬村

2. 生いたち

私が生まれましたのは、諸君らから見れば大昔で、明治41年、1908年。生まれました場所は、奈良県の一番東北の端っこでして、もう少し行くと三重県、それから北へ行くと京都府という三つの県が重なり合っている奈良県の端っここの所で、梅の花で有名な月ヶ瀬。ご承知かも知れませんが、月ヶ瀬っていう梅の名所があるんですが、そこに生まれました。そこで17才まで育ったわけです。

- 上野高校

小学校の校長先生が、中学校を受けてみないかと。家はそんなゆとりはないもんですから、中学校なんかとてもやってもらえとは思ってなくて。しかしまあ、受けるだけ受けてみよって行って、受けた中学は、お隣の、私の村から14キロ程隔った三重県の伊賀、今忍術で有名ですが、上野という、今、上野高等学校といいますが、当時は三重県立上野中学。その試験を受けたんです。そうしたら、どうしたはずみか、合格したもんですから。合格した以上は、うちの両親も、やらざるをえないと思ったんでしょう。村で只一人中学生になりまして、ただし、その寄宿舎とか下宿っていうのは、金かかるからだめだと、家から通うなら通わせてやろうというので、そこで安い古自転車を買ってもらいまして、その自転車で毎日、上り下りのひどい道をです、今はよくなっていますが、あの二つ峠を越えて通ったわけです。それで中学を出た時に、どっか受けなきゃならんと、それで東京へまいりまして、昔は東京商科大学といいましたが、今の一ツ橋を受けた。

3. 学問への出発

六年間も同じ所にいますと、非常に先生と親しくなります。ことにゼミナ-

〈映像〉

○当時の東京
商科大

ルの先生とは非常に親しくなりました、学問というのはこんなに広いものかっ
ていうことを初めて目を開かされたような気がしまして、ところが何を勉強し
ていいのかわからない、田舎の中学から飛び出てきますとですね。その時、そ
の大学は今の神田の一本橋っていう、あそこにあったわけですが、古本屋のす
ぐ裏です。今岩波書店のあるところですが、そこでですね、関東大震災が大正
12年にありまして、私が入ったのが大正15年ですから、2、3年たってるん
ですけども、まだ家はみな壊れてますし、大学はバラックで一階建てのバラック。
実に粗末なバラックですね。建物は何も無い、そのバラックの大学の中にみな
ぎってる、先生方がかもし出すその雰囲気というものは、これは非常に貴重な
もので、学生もそのバラックの中ですね、立派な先生方の講義を本当に熱心
に聞いた。

○三浦新七

でその中でですね、その中で非常に私自身、感動しましたのは、私の今やっ
ている、やってきたこととの関連でいえば三浦新七という先生でして、これは
歴史の先生。ドイツのライプツヒヒ大学で、カール・ランプレヒトというえら
い歴史家について、九年留学してて、帰ってきた人です。それからもう一人は、

○左右田喜一
郎

哲学の左右田喜一郎という。これは、横浜にあった左右田銀行の頭取でしたけ
ども、商業実務を勉強に留学して、向うで、商業実務なんていうことは学問
じゃないと思ったのか知りませんが、段々、段々と変って哲学者になって、カ
ント哲学の、あの当時は新カント派っていいましたが、カント哲学のすばらし

○上田貞次郎

い学者になり、日本へ伝えられたわけですね。もう一人は上田貞次郎という先
生で、これはイギリスへ勉強しまして、行って非常に、実際の現実の経済状態
を勉強して、それを、どういうふうに自分なりに解釈するか、そしてその理論
を日本の社会にどう当てはめるかということを、身をもって実践された、すば
らしい先生です。そういう留学から帰った先生方三人。それからもう一人は、
日本史の先生で、私のゼミナールの先生ですが、幸田成友という先生。これは、
諸君かも知っている文豪といわれる幸田露伴の弟さんです。日本史の大家で
す。この先生の講義を聞き、ゼミナールに入った。

○幸田成友

なぜ日本経済史をやろうとしたかといいますとですね、私、始めその、左右
田先生の影響を受けて哲学やろうとしたんです。ある日のこと、ゼミで報告を
しました。哲学の先生は、なってないっていうんですね、報告は。で、君はそ
んな、その、範疇だとか、概念だとか理性だとか、悟性だとか、そういう抽象
的な言葉で何も頭に入っていないようだから、具体的な事をやれと。言われて
みれば、私はよく言うんですが、トンボがどうした、カマキリがどうした、カ
エルがどうしたっていうことが、私にはわかる。そういう風にすすめられまし
て、非常にその時、悲観しましたがね、哲学やれないのかと。それじゃ具体的
な事をやるのにどうしたらいいかと。

日本経済史をやって、それで日本の古文書を読む。あるいは東大の資料編纂
所へ行ったり、いろんな、文庫へ行ったりして、貴重本の筆で書いたものを読

めるように、なったんです。ま、そういう時やった事は役に立つもんで、今国分寺市史の編纂やっていますが、筆で書いたものをなかなか皆さん読めないから。まあそんな事で日本史をやったんですが、先ほど言った、三浦先生の話の聞いていると、もうどうもですね、日本っていうものを、日本だけで勉強しているんじゃないくて、外から見た時にどういう風に見られるのか、それから日本は外のものをどういう風に受け取ったのか。とくに明治維新以後は、今まで中国を模範にして何千年、千年以上、発展してきた日本が、一体ヨーロッパの何を、どんな程度に受け入れたんだろうと。そこのところを押さえておかないと、いろんな思想があったりいろんな制度があるけれども、本質的なもの、そのエッセンスが果して日本人の中に受け継がれているだろうかという疑問を持ってですね。中国の事やってもいいんですけど、まずヨーロッパの事をやってみたいと。

○東京経済大
図書館で

4. 学問遍歴 (1)

「市民」という考え方の基底にあるものは何か

最初に、西洋史に対して、一般的に疑問を感じたんです。それはどういうことかと申しますと、これは後でもふれるかと思いますが、日本がヨーロッパの文明、文物を輸入し、それを受け入れて近代化をやったわけですけども、その時期がちょうど18世紀の末、特に19世紀である。ということはですね、その時期がですね、ちょうどヨーロッパでは産業革命に入っておりまして、産業革命後にその「国民国家」、つまり、「ネーション・ステイト」っていいですか、それから経済でいえば、「ナショナル・エコノミー」つまり国民経済という、国家を単位として競争しているという、いわゆる列強の競争している時に、日本がそれを真似るということになった。いちばん最初に考えましたのは、日本に、根をおろしていないと考えられる「市民」という考え方は一体どんな根底にあるんだろうかと。で、まあ、余計な事ですけど、私はその非常な優秀な人がですね、日本人であるとか、日本の現代を生きている自分であるという事には違いがないんでしょうけど、それを飛び越えて、学問のための学問っていいですか、非常に細かい原典批判をやったり、非常に細かい事を分析される。これは非常に大事な事です。そういう学者が、たくさんおられます。けども、私がそういう“学問のための学問”ということは一切できない性質でして、自分の方に問題を構えて、そこからどこまで自分の力で問題を解明出来るかという形が、私の素人の学問である。

今でこそですね。市民運動だとか、市民意識だとかあるいは市民権だとかいう言葉は、日常茶飯事のように新聞に出ておりますけれども、昭和7・8年とかあるいは戦前にですね、市民っていうような言葉はほとんど使われていなかった。で私が、何年でしたか、『市民意識の形成』という本を戦後出した事があります。昭和24年でした。これはしかし戦前から書いていたものをまとめたものですけども、その時に私の友達がこんな市民意識なんていう言葉は、日本、

その当時の日本ではわからないだろうと、そんな本売れないだろうと。いやそれだってこれよりほかに方法ないんだっていうのでこの本を出しました。

それから間もなく『都市』という本、ちっちゃい本を27年に出したんですが、都市というようなものはですね、一部の専門家はおりましたけども都市の研究というのは非常に遅れてまして、日本の歴史学界ではですね、農村研究が非常に盛んなんです。なぜかっていうと農村共同体とか、農村は生産に関係しておりますし、そういう関係で農業史あるいは、農村研究はさかんでしたけども、都市研究というのは、ま、ごく一部の専門家を除いてはほとんどなかった時代であります。なぜ都市という、市民という考え方の基礎を研究しようと、こんな風に思ったんですと、これはたまたまですね、その当時、出て間もなくの本ですが、1920年代ですけど、例の皆さんもご承知のマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本を出しました。それからそれと同時にもう一つ『都市』という論文を書いて、世界史的に見た都市の類型学を論じているわけですね。

私はその語学も読めないのとにかくマックス・ウェーバーには非常に学生時代から惹かれて、昭和3・4年からウェーバーにひかれておりましたが、そのウェーバーの『都市』という本あるいは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』というようなものを読んで感じましたのは、都市というものについてウェーバーはこう言ってるんですね。西ヨーロッパの中世都市というものは、非常に、つまり国民国家の起こる前の中世都市、中世都市というものは世界史的に見て非常にユニークな特色を持っていると。それはどういう事かといいますと、その自分の力で、防御施設を持っている。自分で自分を守るという施設を持っている。それから何よりも物を交換する市場の役割、市場が真ん中であって、物資交換の市場であるという特色を持っている。3番目には、自分達の、自分たち自身の裁判所を持っている。それから4番目はですね、都市法という、つまり封建社会の中であって都市法という自分たち自身の法律を持っている。これは封建法とはまったく別のものです。市民の守るべき法、法律を持っている。それから5番目には、これは非常に大事な事です、団体の秩序というものが、団体の外のものによってではなくて、団体員によって、団体員の資格に基づいて決められた自律性を持っている。

つまり外から命令された人が市長になったりするんじゃないんですね。自分達が団体員の資格において決められた、そういう秩序を維持してる。

もう一つ大事なのは、「団体の指導者であり団体の幹部というものは、団体自身の秩序にしたがって任命され、つまり、市民の秩序によって任命され、団体以外の者によって任命される事がないと。」こういうそのいくつかの条件をあげまして、もっとも純粋な形における都市の自治というものは、すでに12・3世紀に、西ヨーロッパにはですね、こういう形で成立しているんだと。

〈映像〉

○ 中世ヨーロッパの町

これは、ウェーバーの学説をいうんじゃないんですが、ウェーバーを考える時に大事な事は、このヨーロッパの中世都市の中でも、アルプスの北とアルプスの南とは違うというので、北欧型と南欧型という区別をつけて、イタリアを中心とする南欧型の都市では、その封建的なものが、市民になり、あるいは、市民も土地を持ち、純然たる封建制度に反抗した市民じゃないんです。非常に不純な形で、市民というものが出来ていると。

そうじゃないところもあるけれども、そういう傾向が強い。それから、その町に住んでおる有力者が田舎に土地を持ってる。で封建的な性格に片寄っていく傾向が非常に強い。だからイタリアでは都市国家になっていくわけですね。ところがアルプス以北へ行きますというと、都市が領土を持っているというのはなくはないけど、きわめて例外であって、市民というものは、農村とも違い、封建貴族とも違った形で、商工業を営みとする者の団体であって、これは誓約団体、つまり一年に一回、市場のある広場に集まりまして、都市法の主なところを読みあげて、これに誓約するかと。誓約というそういうその形式ですけども、それをやって封建的なものを排除して出来てくる、まったく市民的な団体という形を取るわけですね。1年に1回、誓約を行なうという形式、儀式を行なう。で、これをやや拡大したのが今も、今もなおスイスに残っております。ランズゲマインデっていうあの直接民主主義の団体であります。スイスをご承知のように連邦でありまして、各州が集まってスイス連邦を作っておって、各州にはランズゲマインデっていう総会があって、そこで年に一回集って男子は剣をとり、村の規約に従う事を誓うわけですね。あるいは裁判を行なうと。封建的なものを排除して市民、商工業を営みとする、もちろん農業、農民的な市民もいますけども、商工業を営むものが一団となって、誓約して出来た自治というようなものは、残念ながら日本には先ずないといっているんじゃないか。そういう差のあることがわかってきたわけですけども。それでまあ私の言葉で言えばアルプス以北、イギリスやスカンジナビアも含めて、ドイツからアルプス以北ではそういう純粋な形で、ウェーバーの言う都市が出てきたけれども、イタリアではそれが無いということ。これはウェーバーの理論の中では非常に大きな意味を持っているように思うんです。

ウェーバーはいみじくもそこでこう言ってるんです。これは非常に耳の痛い事で、科学的な認識、学問的な、科学的な認識に役立つという点においては、卓抜で慧眼な、その目のひらめきのある慧眼な誤り、誤謬ですね、誤り。「卓抜にして慧眼な誤りというものは、愚鈍にして、なんの精彩もない正確さよりもはるかに学問のために役立つ。」つまり愚鈍でただ正確だという、これを私どもは、“素朴実証主義”と言ってます。ここを調べてみたら、こういうことだからあんたの言う事は間違いだと、一つの例をあげていく。素朴実証主義と普通言いますが、つまり愚鈍な正確さよりも、慧眼なその卓抜なですね、誤まりですね。誤まりであっても、それの方が科学的認識に役立つと。あと訂正していきや

いいんです。例外はこういうのがあるということで訂正していても、本質的なものを追求するという意味においては、非常にこの考え方は私は大事だと思う。

で、そういう風にして考えて、ヨーロッパを見てみますと、ご承知のようにヨーロッパの町は、皆さんも御承知のように城壁をとりめぐらし、それから市の門がありまして、昔はあの門に入る時はですね、市長が持ってる鍵でなければ開きませんから、ローマ法王といえども入る事出来ないわけですね。ですから市の鍵というのは市門を開く市長の保管してる鍵でして、今じゃ東京の市長が、外国人に鍵渡したりしますが、こっちは市門がなくて鍵だけ渡してますけども、向こうではあれは非常に大きなシンボル、自治のシンボルですから、都市法の規定を見ますと、市の城壁を越えて外へ出る、夜中に外へ出るなんていうのは大きな重罪であります。そういうふうにして、城壁と市門に囲まれて、真ん中には市場があり、それからラータハウスとかギルドホールとかいうふうにして市庁舎があって教会があると。で市庁舎とか教会とか市場を、平和を維持する場所だという考え方ですね、12、3世紀からヨーロッパ人の身についた、公共社会のあり方なんだと。ですから、彼はどうかと言いますと、パブリックな、公共のものを大切にする。で自分のものは、これは自分で処理すりゃいいわけですから。何よりも、市庁舎が立派である。教会が立派である。それは、そこに住んでいる者の誇りなんですね。ですから、そういうところではですね、こういう言い方も出来るんですね。町というものは一人では住めない公共の場である。だからそこにおける法秩序というものは、あるいは、社会公德心っていいですか、社会道德というものは、当然守らなければならない何よりも大事なことだと。

市民的道德というものは、個人の個々の道德に先んじて、何よりも社会生活をする上での前提であるという考え方がですね、何世紀にわたって彼らの身についてるわけですね。日本では、国民、臣民、町人という考えはありますけども、封建社会の中で、今言ったような形で出来てくる身分としての市民という考え方はない。当時のヨーロッパを見ますと、都市が市場を中心として経済政策ちゅうか経済の繁栄を、お互いに競い合ってるんであって、国家が競い合ってるということはほとんど絶無に近い。まだ国民経済という意識はぜんぜんないんです。でそれぞれの町が競いあってますから、今日でも、あの町より俺の町の方がいいんだとか、あんな町へ行くのよしなさい、ここにいなさいってなことを、ヨーロッパではよく言われますが、それ程自分の町に対するほこりを持っていて、市民道德というものが、個人の何よりも、大事な社会生活の前提という風に考えられていると、こういう風に言っているんじゃないかと思います。

古代ゲルマン社会の研究

次にはですね、ちょっと、一足飛びのような感じを与えるかもしれませんが

ども、私はその都市の勉強を、今もやってるんですけども、個別的な都市の勉強をやってますが、それとも平行してあの非常に古い、あのゲルマン社会っちゅうものを知りたいと。でその日本の西洋史であまりゲルマン社会をやってる人がいなかったわけですけど、だいたい資料が現れますのは紀元前1世紀に例のユリウス・カエサル、ジュリアス・シーザーですが、シーザーの書いた、『ガリア戦記』、それから紀元の1世紀の末に出てきた、タキツスという人の『ゲルマニア』という、この2つしかゲルマン古代についての、書かれた資料はないんです。書かれた資料がないっていうことは、歴史がなかったということじゃないんで、書かれた資料はその後もずっと中世を通じてラテン語ですね。で、そのラテン語の資料しかなくて、そこに生きてた人の言葉で書かれたものはほとんどないっていう事に私は非常な興味を覚えた。

一つは、一体そのゲルマン的ってなんなのかということになると、ローマでも説明出来ない、キリスト教でも説明出来ないものを、ゲルマニスト、ゲルマン的と言ってるだけの事で、内容がわからないじゃないかと。そういうものをやたらに遊牧民族の社会であったとか、あるいは原始共産制度であったとか、全く自給自足の、狭い狭い、封鎖的な家中心の経済であったとか。こういう事じゃですね、納得いかない。

そこで私は、ゲルマン社会というものの、いわばポジティブな、積極的な姿を自分なりに描いてみようというので、これは、微力ながら徹底的に先程申しましたようなラテン語の資料の他に考古学などを使って、ゲルマン社会を復元するというか、あるいは総括するという努力をしてみました。

そうしますと、なんのことはない、これは原始共産制なんていうものじゃなくって私有権がちゃんとありますし、牧畜はやりますが農耕で定着している民族で、遊牧民ではありませんし、国家もですね、小さい国家ですけども、ちょうど今、北九州で出てる、あの考古学で出たような、その族長がいっぱいまして、ちゃんと秩序があって主従関係も、もちろんあります。そして国家の大事を決める時には、王様が勝手に決めるんじゃないくて、民会というものを開いて、その民会というものの席までちゃんと決まっている。そこでは、貴族の家柄の者は若い子供でも上席に座るけども、手柄のあるものはその次に座るというかっこうで、その貴族と自由民、あるいは解放された自由民、もちろん奴隷もほんのわずかいますけども、そういう社会であって、しかもその奴隷はギリシア、ローマの奴隷とは違って、ちょっと見た目では奴隷の子供という事はわからない。貴族の子供と一緒に遊んでいる。それで自分の家をちゃんと持っている。そんな事までちゃんと書いてあるわけですね。

そういう風な事がわかりまして、民会の運営というようなものは、専制的な支配ではなくて、貴族主義と民主主義、デモクラシーとが、家柄を中心に、血統を中心に、あるいは武功といいますか、手柄を中心に、出来ている社会であって、決して野蛮な社会でもなんでもない。ローマと比較しまして、非常に整っ

た法律があるところよりも、法律がなくって、よい習慣があるゲルマン社会の方が、はるかにすぐれているという、ローマ社会に対する、皮肉と警告を発しているんですが、つまりそういう素朴社会であって、それがローマと接触して驚いた事は、先程、申した国家、帝国、皇帝があり、他民族も支配している。その支配する道具だてとして軍隊があり、役人、官僚がおり、それからローマ法という法体系がある。

それから二番目は、元老院階級を中心として、貴族達は、ラテフンディウムという非常に大きな広大な土地を持って、自分の家族を持たない、売買して取ってきた奴隷を使って、大規模な耕作をやっている。

それから、市民権というもので、市民権を持っている者が町に住んで、同時に大地主であるという形を取っている。もう一つ宗教面では、キリスト教を受け入れると。それからもう一つは、その土地というものです、階級とか権力とかの背景に、つまり基礎になっている。土地経営というものが、支配階層の経済的な基礎だということを、知ったわけです。それまではゲルマンの地では土地があり余っておりますから、穀草経済といいまして、穀物を取る為に草地を耕してですね、その草地に種をまいて、その地力が無くなると、また他の土地へ行って焼畑にして、耕すというんですから、土地が権力のシンボルであるという考え方は、今までなかった。土地があり余っているんだ。人口少ないし、それがあのローマ世界を見ると、土地所有が支配階層のシンボルだということが初めてわかった。

それからキリスト教ですが、これが非常に大きな意味を持つわけですし、世界帝国は否定されましたけども、ヨーロッパではですね、カトリックの教会というものが、全ヨーロッパに広がりまして、これが教区の制度、教会の制度を通じて、精神的に、ヨーロッパというものを一つのものとして育てていこうという基礎を作っていくわけですね。しかも、言葉は坊さん達だけがわかるラテン語である。で一般民衆は、それぞれの地域の話し言葉をしゃべっている上に、教会というものによって、ローマ帝国の遺産をカトリックが受け継いでいった。

5. 学問遍歴 (2)

「古典古代」から「ヨーロッパ中世」への転換の問題

次に、考えざるを得なくなりましたのは、ギリシア・ローマ、古典古代、ヨーロッパの歴史ではですね、自分の歴史、日本の高等学校の教科書もそうですが、古い時代というとエジプトからギリシア、ミケーネ、ローマと書いて、そしてゲルマン人が入って来るってということで教科書が出来てるわけですし、つまりギリシア・ローマというものはヨーロッパ人にとっては、自分達の古代という考え方を持って、教科書が出来ている。またある意味ではそういう面もある、と思うんです。しかしよく考えてみますとですね、古典古代の世界というもの

はゲルマン人は関与していないんですね。全然関与してはいくはないけども、まず関与していない。別の地中海世界である。ギリシア・ローマの文明を自分たちの古代と考えていて、ゲルマン人が入ってから、そこで中世が起こる。だから見方によっては、中世というものが、ヨーロッパというものが成立してきた、最初であるという風に言ってもいいんです。そこで私のテーマは、いわゆる「古典古代」といわれるギリシア・ローマの世界から、ヨーロッパの成立したと思われる中世というものは、それはどういう過程を経て出来てきたか。内容的に言いますと、先程も言ったその、ローマン、ローマネントゥムって言いますか、地中海文明とそれからキリスト教と、ゲルマン的な精神とこの三つの三大要素が、どういう形で融合したのかという、その融合の過程を調べざるを得ないと。これは、つまり中世の成立であると同時に、ヨーロッパの成立ではなかろうか。

私の考え方に非常に大きな影響を与えている、2人の学者をあげたいんです。

○アルフォンス・ドプシュ
肖像

1人は、アルフォンス・ドプシュという人でして、たくさん本を書いていますけども、ここに持ってまいりました2冊の本が主著です。これはオーストリアのウィーンの学者。それからもう1人は、この本を書きましたアンリ・ピレンヌという人でして、これはベルギーの学者であります。この、アルフォンス・ドプシュという人は、結論を先に申しますと、ゲルマン人によってギリシア・ローマの文明が破壊されたなんていうのはまったく人文主義者達、あるいはフランスの学界のでっちあげである。で、ゲルマン人は、先程申したように野蛮人でもなんでもない。それから滅ぼしたというローマの文化というものも、すでにゲルマン人が接触する頃には、ローマ自体が衰えて乱れている時だった。ローマが非常にもう乱れて統制が取れなくなってる、ローマ文化が衰えている所へ、段々それを習って、それを習得してこの南の方の事も知ってきたゲルマン人がじわりじわりと入って行く、そこにはもちろん、ゲルマン人が習った点は非常に大きいけども、ローマ自身がゲルマン人から習った面も沢山ある。だからそれをですね、やれ焼き払ったとか、皆殺ししたっていうような事を例証出来ない。

で、そこで彼は文化というものはですね、この大きな、今まで大きな断絶と思われた時代でさえも実は、文化というものは連続していくんだと。これを「文化の連続説」と彼は言うんです。で、この人は、ですね、おもしろい事に、その19世紀のもろもろの、マルクスを含めてもろもろの発展、発達段階説を全部否定するわけです。その発展段階で世界中を見ろということとは出来ない。で、何の時代、何の時代っていうけども、ドプシュの言葉で言えば、それぞれの時代は、皆、同時的には、コ・エグジステンス、つまり共存している。だからたとえば1つの発展段階説をみますと、実物のやりとりをしていた経済から、貨幣経済になり、その次は信用経済になると。これも歴史はそんなことを証明し

てないと。で、戦争が起きると全部物の経済に変わっちゃうと、貨幣というのは何の役にも立たなくなるんじゃないかと。これはまあ乱暴な言い方です。ドブシュはそういう本を書いています。戦争を経験してきましたから、貨幣経済の貨幣というものは何の役にも立たない。日本の事までも書いている人ですね。だから日本では、米の経済とかいうような経済と共存して長い間続いたということまで知ってるわけですが、つまり、発展段階、マルクス主義を含めて発展段階説というのは一つの体系を示しただけのことで、歴史的事実としては、民族により地域によってどちらに重点を置いているかの差があるだけで、全部共存してると。そういう実体のものとして地域を考えなきゃならんという、非常に面白い学説で、私はこれは、今だに実は参考にして自分の考え方に取り入れているんです。

○アンリ・
ピレンヌ肖像

第2のピレンヌという人は、ドブシュの事も十分知ってはありますが、ゲルマン人が、ローマ人の文化を破壊したのでないというドブシュの説は、自分も全く賛成だ。しかし、自分が強調したいのは、地中海を中心として行なわれていた、いわば世界的な、あるいは国際商業、商業というものがあるわけですねえ、その地中海の東西、あるいはある意味では南北に渡って。そういう、国際的な商業が非常に劇的に、途絶えてしまう。何によって途絶えるかということ、マホメットが7世紀に起って、8世紀にかけて、地中海の沿岸、特にトルコからエジプトを経て、北アフリカを通して、スペインのピレネー山脈まで、あれがイスラム圏に入ってしまうわけですね。そうしますと、破竹の勢いで、こういう大きなバックグッドからコルドバに至る世界が出来ますと、彼らが地中海を制圧してしまう。そうすると、地中海貿易というものがなくなるから、その大きな商品の流通がない。ことにゲルマン人というか北にいる連中、ゲルマン人を中心とした、今のヨーロッパにいた連中は、海に出るということの技術は非常に遅れているわけですね。だから、地中海貿易から断絶されてしまった農業社会に、転落せざるを得ない。これをですえ、ピレンヌは、当時地中海沿岸にあった修道院の倉に収めてあるものの目録を研究資料にしてですね、でその値段を書いてある帳簿を調べた。そしていかに8世紀を境として、その、たとえばパピルスだとか、オリーブだとかあるいは香料とか、象牙とかそういうものがパタッと切られてしまう。で今まで明りをつけるのはオリーブの油でやってたのは、今度は北から出るろうそくに代っていくじゃないか。パピルスっていうエジプトで出た紙のかわりに書かれてた文書が8世紀を境として、羊皮紙、あの羊の皮をなめしたものに代っていくじゃないか。その大転換が、8世紀である。そのきっかけをなすのがあの、アラビア人、イスラムの地中海制覇ということだと。でそこでその商業がなくなるから、ギリシア・ローマ的な商業はすっかり影を消して、それで土地に重点を置いたような、ごく狭い範囲での、経済活動にならざるを得ない、そいつが土地支配に重点を置く封建制度であると。荘園の制度であると。その証拠に8世紀を境として、大量の物の

支払いになる金貨が全然なくなってしまう。本当に金貨がなくなるんです。で銀貨に代わっていくわけですね、8世紀から。

でそういうことをあっちこっちから、資料によって論証いたしまして、この転換は、ゲルマン人がローマ文化を滅したんじゃないかって、アラビア人が地中海を制圧したから、だからやむなくヨーロッパは封建制度にならざるを得なかったんだと、こういう風に説いたわけです。

ピレンヌはそう言っておきながらですね、そういつて8世紀で衰えてしまつて農業社会になるんだと言いながら、それが11、2世紀になると、もういっぺん商業が復活すると。それはどこからかという、イタリアの商人はですね、今のアドリア海を経てビザンチン帝国のコンスタンチノーブルと交渉があったと。で、そういうことがきっかけとなり、それから北の方では、バイキングが、北の方からですね、入ってきていろんな取引きをして、南の物を北へ持つて行くと。だから南ではイタリアの商人、北では、バイキングの活動というものに囲まれたヨーロッパ世界の中に、まず最初に、そういう商人の行く場所として、イタリアのポー河の流域ですね。北イタリア、今のロンバルディア、カルトス間の北イタリアと、それから北の方では、今の北フランスから西北ドイツにあたる、今のベルギーのあたりですね、ま、ピレンヌ自身ベルギー人だからでしょうが、その辺にボツボツとあの商業が起ってくると。でこれを彼はそのリバイバル・オブ・カンマースといって商業復活。そこへ十字軍が加わりますから、俄然イタリアと、それからフランスの北、今のベルギー・オランダ辺りを中心にして商業が起って、そこをきっかけにして全体にダートとその起って来る。商業が盛んになるのを表すのが中世都市であると。中世都市というものが出来てくる基盤は、そういう、国際的のちゅうか、あるいは世界情勢の中で、11、2世紀を待たなければならなかったと。

ピレンヌのこの構想について、なぜ11、2世紀に、西ヨーロッパに、中世都市というものが雨後の竹の子のごとくに起こってくるのか、その起こる場所は、北イタリアとそのベルギー地域であるけれども、なぜそういう事になるのかっていう問題。それをこう実証して、私としては、そういう見方とは変えて、これ、誰も言わないことだけれども、西ヨーロッパ自体が、8世紀から11世紀までの間に農業生産力にどんな変化が起ったかを、これこそ実証してみなきゃいけないと、いうふうに考えたんです。

「西ヨーロッパ的」経済基盤の成立

ヨーロッパの農業の代表として、三圃農法というのが行なわれているわけですね。つまり全体の耕地を、三つの広い場所に、分けて、夏穀と冬穀と、それから休閑地を作って、それが1年ごとに、こう交換して地力を回復させるわけ、これを三圃農法っていう。

○フランスの
農場
(三圃農法)

ところがですね、この今までの考え方では、三圃農法という帯状に持ち分を各人が持つてるといふのは原始共産制の遺物である、というのが圧倒的に強

い考え方。大昔ゲルマン時代にみんな平等に分けたっていうのが、その歴史に現われてくる時には不平等になってるだけのことで、もとはみんなくじ引きで同じだったんだと。

で私の疑問に思ったのは、ゲルマン社会において、2、30戸を単位とするような集落が、考古学的に証明されうるんだらうかと。それから、そんな古い時代に誰が命令して、そんな合理的なですねえ、地割りを行なうような事が出来たんだらうかと。ここは誰もが疑問を抱くこと。しかしこれを徹底的に調べるっていう仕事が今まであまりなされていなかった。

そこでまず最初に、考えましたのは、三圃農法というものがいつ起こったかということ。これは素人でありながら、大いに苦勞しまして、考古学の本なんか読んだことないのに、向こうで村の発掘があったレポートは出来るだけ調べてみて、そして、自分なりの結論を得ました。

それはどういうことかと言いますと、三圃農法を証明する、文書で書いた資料は8世紀以前にさかのぼらないということと、それから向こうにある村落墓地が、土葬の村落墓地が、大変、沢山発掘されてまして、それが一つの集落がありますと、その付近にずーっと、寝棺のままで土葬してあるんですね。

三圃農法が起こるのは800年頃から後であって、それが広がって地域は、ライン・セーヌに挟まれた地域から、どんどんどんどん、東のドイツの方へ広がる。それからイギリスへ入っていく。イギリスへ入っていく過程もよくわかる。それからフランスはロワール川までずーっと広がって、三圃農法をとって、生産力が大きくなると、人口が増えてきます。そうすると、生産力で余剰の穀物が出来ると、穀物を作らないでも他の物を作って食っていける村が出来てくるわけですね、妙な言い方ですが。と同時に、たとえば同じ頃、11、2世紀になりますと、さかんに、修道院なんか山をひんむいて、ブドウを植えたりします。すると、穀物作らなくともですね、ブドウを売った金で、余剰生産物のある穀物を買えばいいということになります。で一言に言って、それぞれの地域に応じて、穀物に重点を置かないで、その土地に適した物を作る地域が増えてきたということですね。これを特産物生産と言ってもいいでしょう。11、2世紀から特産物生産で村が成立するということが、どんどんわかってくる。と同時に、お金が入りますから、今まで賦役で労働で、体を縛られてた農民達は、今度は金納に変えてきます。金納に変わってくると、自分が村を出ていったっていいと、金を払えば出ていける。自由になると、ということになりますから、増々人口移動が激しくなってきた、そして特産物と、余剰の穀物とを、交易する場所として当然市場が出てくるのは、自明であります。

こうして、町というものが、いわゆる中世都市というものが起こる経済的基盤が、すっかり3～400年の間にじわじわと起こってきた。だからピレンヌの言うことを否定できませんけども、ヨーロッパ国内にそういう産業が起こる基盤が出来てきた。でしかもそこで大事な事は、原料である亜麻であれ、大麻であ

れ、羊毛であれ、ブドウ酒であれ、西ヨーロッパの取り引きされるものはその場で生産されている原料だということですねえ、つまりロシア、東ヨーロッパで言ったように贅沢品がいくんじゃないんです。日常取り引きしてるものが、原料としてヨーロッパで出来て、でそれを材料として、産業が、インダストリーが起こる。毛織物業が起こる、麻織物業が起こる。つまり生産コストがわかっていて、あるいは豊作か凶作かという、年によっての変化がわかっていて、そしてインダストリーが起こるという事になりますと、そこにおける経済活動というものは、合理的な計算が可能であるという前提の社会であると、ということだと思うんです。

6. 学問遍歴 (3)

(「国民国家」「国民経済」「主権概念」の成立)

一言に申しますと、西ヨーロッパは、だんだんとではあるけれども、単一の価格体系の世界、つまり価格体系のわからないものじゃなくて、原料、生産過程まで全部わかる単一価格体系の経済世界としても、非常にユニークな経済基盤を12、3世紀までの間に、作りあげていくわけです。

まだ国民経済というものはない。そこで網の目の、結び目のようにあるのは都市だけです。だからどこの国の都市なんてこと問題にしていない。どこの町の人と、よその町の人。フォリナーである、外国人じゃないです、よその町の人という意味でねえ。

で、そういう体系が基礎として出来あがっていると、私も心の中では、そういう世界から、どうして国民というものを中心にした国家が、相互に競争するようになるのか、どうして国民経済というものを単位として、経済学というようなものが、うち樹てられるのか、どうしてその主権というスベレニティーという、領土と主権と国民とあって国家が出来るといいますけども、主権概念というものがどうして出来てくるんだろうか。これが私には、今、非常に大きなテーマとして、勉強してる最中なんであります。我々今考えている、国民国家、国民経済というものは、少なくとも歴史的には、19世紀、ま、18、9世紀に出来た歴史的産物なのであって、絶対に変わる変わらないものというものではないと。つまり、相対化の可能性がありますし、それから戦争が起こりますと、国境はどんどん変わる例は、今だにまだ行なわれている現象でありますから、日本人が考えるような国では、国民国家や国民経済を考えるのはおかしい。

そうしてみると、ヨーロッパには不思議な事に、まだ古いこの小国の論理っていいですか、小さい国がたくさんというかかなりあるわけですねえ。え、リヒテンシュタインだとかルクセンブルクだとか、つまりベネルックスはみんな小ちゃいわけで、ことにひどいのは、先程言ったスイスのような多民族国家であり、多言語国家でありながら、一つの国家として存立しているのはどういうことなのか、たとえばフランスはフランス語である、スペインはスペイン語

であるという風に言いますが、それはそのスペインへ行ってみんなあのスペイン語が、話されてるかっていうとそうでない。つまり国語というものは、公式の言葉であって、ヨーロッパというものは、3、40のあるいは4、50のと言ってもいいかもしれませんが話し言葉のある、多民族の、多数の話し言葉の今だに厳然と存在している、非常に面白い地域であると。

私としては西ヨーロッパが、今日は東ヨーロッパの事話せませんでしたけれども、非常に違った、共通の問題を持ち、地域によって非常に多様であるけど、それを乗り越えた、その歴史的伝統を彼らは自覚しようとしている。だから簡単には一つの国にはならないが、この多様性というものを残しつつハーモニーを保つ知恵を発見するだろうという、それはアメリカとは全く違いますし、ことに東洋とは違った形のものになるんだろうと思うんです。

7. 社会科学の課題

歴史の場合にはですね、あの、つまり国民国家というようなものをあまり自明のこととしないで考えてきますと、私は地域史研究ということが非常に大事だと。

つまり、人間、庶民の生活に、政治は別として庶民の生活に重点を置いて、歴史の移り変わりを見ようとすれば、大小さまざまな地域の住民というものを総合的に把握する道を考えていかなきゃならない。地域は細かく言えば一つの町、一つの村でもいいんですが、ある問題だと例えば関東地方とか、あるいはもっと大きくしたって東南アジアとか、北アフリカとか南アフリカ、なんでもいいんですが、つまり国というものにとらわれなくて、住んでいる住民の有り方、それをどういうふうにしてつかまえるかと。それに、その問題が一つあると、つまり国民国家、国民経済というものを、相対化していくと。それから世界政治の動きから見ましても、あるいは世界経済の動きから見ましても、もはや国民国家、国民経済が独立の単位として、存立する時代じゃなくなったということは、言えると思うんです。

今までの西ヨーロッパの、社会科学者の学説から一応離れて、問題を構える時にどんなアングルというかどんな視角があるだろうかということを、ここ数年間は、考えぬいて困っているんであります。

それをですね、結論的に申しますと、私は世界史における、高度な文明あるいはこれは高度宗教であってもいいんですが、高度文明または世界宗教といいますか、そういう高度に発達した文明、または宗教と、伝統社会が持っている、文化形成の力。伝統的な社会が持っている文化形成の力との押し合いの関係をどう比較するかという。どういう対応の仕方を示すか、あるいは反発を示すか。といいますのは、高度文明というのは、現在について言えば、科学技術文明であって、これは西ヨーロッパで出来た学問の到達する所、世界中を席卷し、世界中を取り入れてしまうほど、科学技術というものが、今我々の足元に、ある

いは、全生活の上にのしかかっているわけですが、古い時代で申しますと、東洋でいえば漢字文明、あるいは仏教文明、ヨーロッパで申せば先程から言っているキリスト教的ドイツ文明、もっとさかのぼれば、ローマの文明、ギリシア、ヘレニズムの文明、こういうのはその伝統的な社会の上へ、普遍性を持っているという風に受け取られて、どんどん入っていくわけです。

私流に言えば、文明は普遍的に広がっていくもの、文化はそれを受け入れる伝統的な個有のものであり、地域性を持ったもの。その地域地域でそれを受け入れる、受け入れて自分のものにしていくと。自分の血とし肉としていく力が、文化の形成力であって、今、日本でもわいわい言われておるように基層文化だけを調べてみたって、文化形成力のわからないもの、仏教が入ってくる以前どうであったなんちゅことはいくら言ってみたってですね、それをどう受け入れたか、どういう、誰が何の為にどれだけの対応の仕方をして変化させながら、自分のものにしていったかっていう、その力を比較してみる必要があるわけですねえ。

ですから文明と文化というものの関係を、それこそグローバルに我々調べてみるのが、今までの考え方を脱却する一つの、一つの方法じゃないかと、こんな風に思うんです。ですからこういう考え方からしますとまあ、あまり大きな事は言えませんが、民衆の知的水準というものの、といいますかあるいは私はソーシャル・モビリティっていつておるんですが、そんなに身分とか家柄がよくなくとも何かをきっかけにして、その上の階層へ入っていける可能性があるところと非常にそいつがないところがある、あるいは、ない時代とがある。

現在で言えば、現在の科学技術文明を受け入れる意欲なり力なりになっているか、これはしかし馬鹿にならないんであって、実はその社会の秩序の有り方を比較する上においては、どんな政治論よりも経済論よりも、大きな問題を含んでいると私は考えるわけであります。

〈映像〉

○ふたたび学生たちと大学キャンパスで

8. 青年たちに与える

最後に、こんな年になりまして、80をとくに過ぎて非常に遅いんですが、気がつくのが遅いですが、自分の全然知らない世界の事を、本で読んで知ろうとするわけですが、私は本を読んだり、講義を聞いたりして得るものは、それは私の言葉で言えば知識に過ぎないと思うんです。で、その知識が自分のものになって、事に臨んで自分の態度が決まる、それが私は知恵だと思うんですねえ。

私、大事なものは、そういう暗記した知識じゃなしに、物事がわかったということに働く、私の言葉で言えばそのビールやお酒を作る時の酵母みたいな役割をするもの、それはごく、ごく具体的なごくわずかな、日常どこにでもあること、誰でも経験できることだけでも、その経験がですねえ、幼ない頃っていう

が少年、青年せいぜい20才前後の間において経験し、そして考えた事、そういうものが酵母になって、それが地域的にも広がり時代的にも広まって、読んだ知識の意味を自分なりに理解するという、その酵母の働きをする、ということはこの頃しみじみ思うんです。

自分のその酵母として持つて、原体験の意味をですねえ、どんどん、どんどん広げていくというとそれが世界史になり、あるいは世界の全体を見る立場というものが出来てくるんじゃないかと、えーそんな事古い思い出なんていうのは、少なくとも一貫して、細々とでも一貫した自分の仕事とか、自分の思索の遍歴っていうものをたどっていく時には、非常に貴重なものが原体験であるという気がしてならないんです。

その意味で私は大学生活っちゃうものは、これは、単位取って卒業して就職するなんていう手段とすべきもんじゃなくって、その手段も結構ですけども、人間を作っていくとか、人柄を作るという意味においては、友達付き合いや先生との交渉あるいはいろんな経験、そういうものを心の中にアンテナで受け取って、それを忘れないで、それをもとにしてだんだん、社会、世界の動きを見る目のもとにしていくというような意味では、非常に大切だという気がしてならない。つまり自分というものを磨く為に考える姿勢ですね。考える学生になってほしいんです。ノートする学生とかいい成績を試験で取る学生よりも、考える学生であってほしい。で大学での成績っちゃうものもありますけど、実社会へ出ると、人柄で評価される。全面的に評価されるんであって、決して単位で評価されるんじゃないわけですね。だから私がそんなこと言った、それじゃあんまり熱心にノートなんかしなくてもいいんだな、というふうに取られないようにしてほしいんですが、言いたい事はそういうこと。自分の血となり肉となるものは何かを絶えず考えながら、あんなこと先生あれほど熱心に言うのはなぜなんだろうと、非常に熱心な先生の講義聞いてるとつつられてああそうかなあと思うと、それはおおいにそれでいいんです。だから大学の1年生、2年生、3年生位はですねえ、うんと自分というものを考える為に、僕は、迷ってほしいと思います。

で、結論申しますとですねえ、そういう勉強の仕方をして、この自分なりのオピニオンを持てる人間になること。しかも二重人格にならないで、一貫したものを追求していくような。心の中でですよ。仕事はいろんな仕事やりますよ。しかし、付和雷同しない。論語の言葉で和して動ぜず、という言葉がありますが、そういう付和雷同しない、自分の意見を持てる人間になる。それが出来て初めて、デモクラシーというものが、健全なデモクラシーが出来るんであって、デモクラシーっていうのは掛け声だけじゃだめなんです。日本でこれほどデモクラシーって言うておきながら現実がいかに非デモクラチックな動きがあるか、もう諸君らご承知の通りですね。だからまず自分が、社会生活の中で自分の意見を持てるような心を磨いていくと。大変その、道学者のような話になり

ましたけども、これをもっと、日常的な経験に照らしてそういう道を、図書館もあるんですし、先生もいるし、この状況の中をフルに活かしてですね、勉強すると。それが一番大学での勉強の仕方じゃないかと、こんな風に思います。

〈映像〉

○キャンパス、
噴水
屈託ない表
情の学生た
ちの群

9. エンディングタイトル